



希 望

多治見市立笠原中学校
令和7年度 学校だより『希望』
第8号 令和7年10月29日(水)発行

Politeness (礼儀正しさ)

校長 熊崎 健一

先日、東濃地区西部(多治見・土岐・瑞浪の3市)の中学校と高等学校の校長が集まる会合がありました。公立・私立、市立・県立を問わず、中学校と高等学校がお互い理解し合い、連携の強化を図ることが主な目的です。まずは、授業参観をさせていただきました。商業高校へお邪魔しましたので、国語や数学などの教科だけでなく、商業に関する課題研究の学習なども参観させていただきました。アプリの開発、マルシェの準備、株式投資、資格取得に向けた取り組みなども大変興味深いものでした。どの生徒も、学びを“ジブンゴト”としてとらえ、課題解決に向かって生き生きと活動していました。私も、生徒や職員に「何のためにするのか?」という目的意識の大切さを訴え続けていますが、さすがは高校生。一人ひとりが自身の課題に向かう真剣さや仲間と学び合う姿が際立っていました。

学習の様子もさることながら、とても感心したことがあります。それは、生徒の“礼儀正しさ”です。廊下ですれ違えば、立ち止まって「こんにちは!」と挨拶してくれます。学習中であれば、目を合わせて会釈をしてくれます。TPOを意識した立ち振る舞いに好印象を抱きました。また、学習内容について尋ねれば、丁寧な言葉で親切に応じてくれました。私が中学校で担任をしていた30年ほど前にもその学校を訪れたことがあります。そんな礼儀正しい生徒の姿は、当時と全く変わることなく受け継がれていました。素敵な“学校文化”を感じる事ができました。



会合を終え、車で校門に向かいました。私の前の車も市内の中学校長でした。その車が一人の女子生徒の横を通り過ぎました。すると、その生徒は“やはり”立ち止まって深々とお辞儀をし「さようなら!」と挨拶していました。そして、わずかな時間、遠ざかっていく車を見送っていました。車はすでに通り過ぎていましたので、運転の校長は、おそらく気付いていなかったかもしれません。それでも“礼を尽くす”彼女の姿には感動しましたし、校門を出た後も清々しい気持ちがいしばらくの間続きました。

“礼儀正しさ”とは、挨拶やお辞儀・会釈、言葉遣いなど、目に見えたり耳に聞こえたりすることから感じる人が多いわけですが、実は「どんな気持ちで行っているか」がとても大切です。相手を敬う気持ちや進んで他者に関わろうとする意欲が、美しい態度となって表れると思うからです。また、その行いは、気持ちとして相手に届くものです。そういう意味で、心のこもった挨拶などは、人と人とのコミュニケーションにつながっていきます。そんな素敵な挨拶や心ある行いを意識できる中学生・人に育てていきたいものです。



～ 多治見市【親育ち4・3・6・3たじみプラン】親育ちコラム ～ 『そうか、自分もちょっといいかも… (前編)』

子供たちの成長を願う時、私たちはしばしば“挑戦”という言葉を使います。今の自分の力より、少しだけ難しい課題や状況に向き合い、それらを解決したり乗り越えたりする方向へ行動する姿を「挑戦できたね!」などと認め励まし、伸びるよう願います。例えば、午後の学習で、眠気に負けないで前を向こうとすることも、状況によっては決して簡単なことではなく、立派な挑戦といえます。そんな時、一瞬の寝落ちがよくあることですが、中には机に伏せてしまい、声をかけても全くやる気を見せない子がいます。一見、怠けているようですが、その子の心の深いところに、実はどうしようもない悲しみが隠れていることがあります。「自分の行動が、期待した結果に結びつかなかった。」という経験を積み重ねていくうちに、やがて「自分には何かを成し遂げる力などない…」「自分なんかは何をしたって意味がない…」と思い込んでしまっている状態は「学習性無力感」と呼ばれます。「たるんでいるぞ!」「やる気を出そう!」「自分を甘やかすんじゃない!」悲しみの底にいる子に、こんな言葉をかけ続けた若い日への自戒を込めて、その子とどう向き合うべきだったかを一緒に考えていただけませんか。(次号に続く)

【教育推進課 家庭教育担当】